

田園俳人松本椿年の生涯と作品（三）

——昭和初期から昭和四十年頃（高齢期）までのライフイベントと作品——

宮 川 充 司*

昭和初期の作品補筆

俳人松本椿年（本名松本傳次郎）は、明治二十年（一八八七年）七月に静岡県駿東郡中嶋村（現在の静岡県駿東郡小山町中島）の旧家に生まれ、昭和六十一年（一九八六年）二月に生涯を閉じた地方俳人である。十歳の頃から、俳句の宗匠でもあった父親から俳句の手ほどきを受け、その父親の没後から最晩年満九八歳で生涯を閉じる臨終ぎりぎりの所まで、ほぼ一世に亘る日本社会の激動期を、農村の中で農耕と生活に密着した句作とともに生きた俳人である。この俳人について、宮川（二〇一六）で年譜の試作版を作成した。この年譜は、俳人本人あるいは他の研究者が何も残していないところから、まさに零からの出発であった。その手法として、もっと大きな俳人の生涯という枠組で、俳人の個人史を作成し、その中から後に俳人としての年譜を作成するような方向での資料収集と生涯の出来事（ライフイベント）の分類整理の試みであった。この俳人の

作風は、単なる想像や言葉遊びの手法で俳句を作るのではなく、農作業の傍ら体験する自然の観察や生活の中で起こっていくさまざまな出来事を、そのまま作品とする生活俳句が本領であり、また「習作期」と「投句休止期」と名付けた時代を除き、月刊を基本とするいくつかの俳句誌にはほぼ毎号のように投句を続けていたので、俳句誌が現存しているものについては、作品の作句時期を特定することが比較的容易である。また、その作品で表現される生涯の出来事と、子孫から提供を受けた付帯情報とを照合していくと、作品から人生の中で起こった出来事を組み立て、年譜を構成していくが可能と判断できた。

ただし、この俳人が投句したと考えられる俳誌は、その全部がいずれかの図書館等で所蔵されてる訳ではない。例えば、大正期から昭和期の初めにかけて加納野梅が主宰していた俳誌『鬼栗毛』と『新草』は、所蔵している図書館が見当たらない。かろうじて、国立国会図書館に刊行本『新草俳句集』として、その選句出版物が残されている。また、これは同館デジタルコレクションとして公開されて

いる。これは主宰加納野梅が『新草』の創刊号（昭和四年五月）から第四〇号（昭和七年八月号）までを選句編集し、昭和七年（一九三二）に刊行したものでその一端を知ることができる。ちなみに、椿年の作品は三十四句掲載されている。冒頭の正月の部初頁に椿年の作風としても不思議な句が掲載されている。

元旦 元日の炊煙立つや刑務所 （一頁）

句意は、元日でも刑務所では、そこで正月を向かえている人がいるので、煙突から炊事の煙が登っているという正月と殺風景な刑務所を対比させた正月の句としては異例の趣の句である。正月といっても、そこで新年を迎えた人たちにはおめでたいはずがない。その刑務所は何処の刑務所か。また、偶々その側を通りかかっただけなのか、それともそこに誰か縁故の者が収監されていて、正月のものを持参して慰問に行つたのであろうか。後者であるのではないかと推論するためには、周辺の人で誰か刑務所に入れられた人が特定できない限り、その解釈は成り立たない。昭和四年五月から昭和七年八月まで俳誌『新草』投句された椿年の初期作品である。その頃投句をしていた俳誌『曲水』や『大富士』に掲載された句を見ても、この句と同じような趣を持つ椿年の句は皆無であった。また、椿年の遺族に尋ねても、戦前刑務所に入った人のことを椿年から聞いたことがあるという人はいなかった。偶々大正十二年八月十八日に起こった富士紡績小山工場の労働争議（労働組合の結成騒動）とその争議の犠牲となった矢後利一という労働者の短い生涯を調査した岩田（一九九七）の論文を見つけた。

岩田によると、発端は、日本労働総同盟に加入していた一人の労働

働者が会社により解雇された。その解雇を不当とする工場の労働者がその日労働組合の結成集会を開こうとしていた。その最中に、会社側が雇い入れた右翼団体がその集会に乱入し、矢後らに暴行を加え、乱闘騒ぎになった。警察が介入し、三十人余が検挙されたが、日本労働総同盟に加入していた矢後利一ほか四人のみが起訴され、沼津刑務所に収監された。その顛末は富士紡績の労働者の多くの涙を誘った。また、その争議を受け、富士紡績小山工場の労働者がストライキに突入するという事態に発展したが、その二週間後の九月一日関東大震災が起こり、富士紡績の小山工場も二工場が被災し、多数の死傷者が出たため争議は収まった。当時、椿年は富士紡績小山工場に勤めていた。情に篤い椿年のこととて、会社をはばかりながら沼津刑務所に服役中の元同僚達を正月に慰問したのではないかと考えると、この句が作られたのは大正十三年ないし十四年頃の正月で、『新草』に投句したのはその数年後と考えると、この句に隠されている椿年の句意が読み解けるのではないだろうか。

矢後利一は、明治三十五年一月に静岡県駿東郡六合村（大正元年に現在の小山町）藤曲に生まれ、椿年の母校でもある六合村成美尋常小学校に入学し、六年の時に学校再編で小山町菅沼高等小学校に転校、高等科一年で退学。富士紡績に入社し、大正十二年八月の争議で解雇され、服役の後、大正末年に宮城県桃生郡前谷地村に移住し、農民運動に参加した。昭和三年三月に大地主と小作人が対立した前谷地事件が起こり、日本農民組合宮城県連合会書記として関与、逮捕され六か月の実刑判決で服役。服役中に結核に感染し、昭和七年五月二十二日死亡。遺体は茶毘に付され、分骨された遺骨は矢後家の菩提寺である小山町中島の臨済宗勝福寺の墓地に葬られた。勝福寺は、椿年の生家近くにある松本家の菩提寺でもある。

椿年の昭和七年六月頃の俳句と推定される作品に、土砂降りの中
を行く葬列を詠んだ句がある。時期的にその年の五月に亡くなった
矢後利一の分骨を少し遅れて寺の墓地に納めた時期と重なるが、偶
然の一致であろうか。ちなみに、矢後の生家のあった小山町の藤曲
から、菩提寺の中島の勝福寺にひっそりとした列を仕立てていった
とすると、椿年の住居の前を通っていく道筋にあたると考えられる。
旧暦五月の雨、梅雨の雨が頼りに降る中を葬列が進む。葬列の紙に
書かれた旗（幡）が雨に打たれて落ちて竿ばかりになってしまっ
ているが、それでも列は進んでいる。何とも気の毒なことだ。

五月雨や葬列の旗竿ばかり

（『曲水』第十七卷第十一号 昭和七年十一月号 曲水句帖
四九頁）

『新草俳句集』に掲載されている椿年の三十四句のうち、次の四
句は椿年が昭和四十五年（一九七〇）四月に刊行した『句集 老稚』
に、選句掲載されている。

鶯 鶯や谷押しあぐる雪解霽 （五七頁 『句集 老稚』六〇頁）

櫻 晴れ間見せて尚降る雨や遅櫻

（七九頁 『句集 老稚』七四頁）

門火送り火 送り火の灰残りけり草の上

（一二六頁 『句集 老稚』一七九頁）

唐辛子 鮮人や暗らき厨に唐辛子

（一九四頁 『句集 老稚』二〇三頁）

第四句は、昭和初期に富士紡績小山工場には多くの朝鮮人労働者
が働かされていたが（岩田、一九九七）、気さくな椿年はその社員
の家を訪れた時の句であろう。

また、もう一句、『新草俳句集』の句に『句集 老稚』の類似句
がある。ほぼ同一のモチーフの句であるが、『句集 老稚』の句は
直接には、まさにその句集を編集している時期に、原田濱人主宰の
俳誌『みづうみ』に投句したものを採っている。

晝寝 晝寝さめて欠伸すあぎと痛む程（一一五頁）

顎痛きまでに欠伸や昼寝覚め（『句集 老稚』一二四頁）
（『みづうみ』第三六一号 昭和四十五年二月号 一〇頁）

また、同じく、昭和四年四月に椿年の母校静岡県駿東郡小山町成
美尋常高等小学校に、校長として、俳誌『曲水』の選者でもあった
古見豆人（本名古見一夫）が着任した。着任早々、務めていた富士
紡績小山工場の俳句部の指導者として迎えることを、幼なじみの早
間冬青子や坂本緑村らとともに要請に行った。部外（社外）の俳人
湯山素鷗や湯山逸素らを加えて、「あゆみ句会」が起こされた。また、
豆人の推薦により、渡辺水巴主宰の俳誌『曲水』への投句を開始し
ていく。前稿（宮川、二〇一六、二〇一七）では、この『曲水』に
おける最初の掲載は、昭和四年九月号（第十四卷第九号）としたが、
これは号数を含めて誤りであることが判明した。まず、昭和四年九
月号は、九号ではなく、十二号の誤記であった。それ以上に、日本
近代文学館に国立国会図書館の所蔵巻号を補完しても、なお欠号と
なっていた昭和初期の『曲水』の巻号の一部は、俳句文学館の所蔵

巻号をもって、補完できることが判明した。それにより、椿年俳句の『曲水』への最初の掲載は、二か月遡る、昭和四年七月号である第十四巻第十号からであり、次の二句が椿年の最初の掲載句であることが判明した。

大藪の明るさ見ゆる辛夷かな
夕風に春行く麥の戦ぎかな

〔『曲水』第十四巻第十号 昭和四年七月号 第一句渡辺水巴選『曲水句帖』四五頁、第二句鈴木頑石選『雑詠』六九頁〕

また、『曲水』での最後の掲載句は、昭和十年一月号の次の三句である。

小鳥来るやただれきつたる土あけび
秋晴や樹海の中の我の咳
茸狩や山かぶさりし水の音

〔『曲水』第二十巻第一号 昭和十年一月号 水巴選 曲水句帖八八頁〕

なお、この第一句は、『句集 老稚』百九十五頁にも選句掲載されている。

俳誌『大富士』の作品から

豆人が起こしたあゆみ句会の輪は昭和六年に「大富士吟社」として拡充され、俳誌『大富士』を刊行、急速に発展していくこととなった。この経緯は、前稿（宮川、二〇一六、二〇一七）で、詳しく論述した。古見豆人主宰の俳誌『大富士』は、昭和十三年豆人が小山町立第一尋常高等小学校長の職を辞し、東京世田谷に転居したことにより、中央誌としての位置づけに変化し発展していくことになるが、皮肉なことに、小山町の句会の活動は有力な指導者を失ったことにより、徐々に衰退していくことになった。豆人は、小山町を去った後、急速に小山町の大富士同人の活動が低下していったことを苦慮して、翌年二月に小山町を再訪することにした。しかし、日本社会全体が、日中戦争から第二次世界大戦へと突入していく時代背景とも重なって、椿年は「句作をすれども、投句をせず」の俳句誌への投句休止期（昭和一六年頃から昭和二七年頃）へと移行していく。なお、この投句休止期とされた時期のごく一時期、それはGHQによる出版検閲が解除された昭和二十三年五月から翌年にかけて、『大富士』第十八巻第五号（昭和二十三年五月号）から第十九巻第十号（平成二十四年十月号）までの時期、椿年は『大富士』への投句を再開した。しかし、この投句再開も、一年余りで途絶え、再び投句休止期に戻ったことは、前稿で記載した通りである。この一時的な投句再開の時期を除き、俳句誌への投句休止期に作られた作品は、作句時期を特定するのが困難であり、したがって作品から椿年の周辺で起きたライフイベントの推定も困難である。

次に、第二次世界大戦終了頃から、昭和四十五（一九七〇）年四

月、最初の句集『句集 老稚』発刊頃まで、椿年五十八歳から八十一歳頃までの作品とライフイベントについて論述する。

本稿では、椿年の前稿の年譜を、特に戦後に事項を追加補完したものを、椿年年譜改訂第二版として公表する。この年譜において、太字体で表示してある部分が、本稿での新しい追加補完事項である。椿年の戦後を含む生涯の主な出来事の概略は、前々稿（宮川、二〇一六）で行っており、一部に事実関係や年代の微修正が必要であるものも含まれているが、特に追加補完事項を中心に論述する。

椿年の戦後数年は、俳句誌への投句による作句時期が特定できる作品の他、子孫から提供を受けた家族構成の戸籍事項の情報を基盤にしている。戸籍事項の中には、記載を慎重に取り扱うべき事項も含まれているが、椿年自身が作品として出来事を公表したものは表現上の工夫を行うことで、個人の尊厳を損なわないように記載する。また、紙面の制限もあり、年譜に補完している事項についても、昭和四十五年五月以降の事項については、次稿で取り扱うこととする。

椿年の家族は、昭和十五年四月に長女のイマの配偶者辰雄を嗣子として養子縁組を行い、昭和十五年に辰雄とイマに長女京子、昭和十七年に次女奈美江が誕生する。昭和十八年二月には義兄（長姉まさの配偶者で、松本家を相続 紋次郎（俳号竹因）没、昭和十九年には、初孫光弘が早世するという出来事に遭遇する。昭和二十年二月三女志磨婚姻、十二月には次兄啓作が逝去。翌昭和二十一年二月には、辰雄とイマの次男典彦が誕生、また椿年の四女みどりが婚姻、昭和二十二年四月には松本家の養女とした六女喜美子と山崎栄が婚姻し、婿養子として松本家を継ぐ。昭和二十四年四月には、辰雄とイマに三男の時男が生まれる。昭和二十六年十一月には椿年の五女愛子が婚姻し、俳句仲間の石田仏子夫妻が媒酌人を務める、

また他家に嫁いだ娘に外孫が相次いで生まれるなど、多くの出来事が、六十歳を越えた初老の椿年に訪れていた。

また、長らく投句を休止していた俳句誌への投句活動も再開する。古見豆人主宰の俳誌『大富士』の巻末には「支部精進情報」という欄があり、大富士吟社の各支部活動報告の記載がある。戦前は、「各地句座」という名称の欄であった。豆人がまだ小山町に在住していた昭和十三年三月頃までは、「あゆみ句會」と称し毎月一―二回程度のペース、湯山素鷗居（通称「飴屋の二階」）を会場にして盛んに句會が開かれていたが、豆人が小山町を去った後その記録がまばらになり、ついには『大富士』第十巻第四号（昭和十五年四月号五五頁）に記載の記録、「日時 皇紀二六〇〇年二月十日夜 會場 大坂屋藥房（石田佛子庵） 會員 志郎・沐人・朱雀・碧露・佛子・閑江」という佐野閑江の記録を最後に途絶えてしまう。その日の参加者に椿年の名前はない。その巻号の前頁から「句會行脚 豆人」という欄があり、豆人が東京都・神奈川県・静岡県各支部を回って開催した十回の句會の記録が掲載されている。その「駿河小山あゆみ句會」「三月六日夜、音淵志郎居に開催」とあり、豆人以下十一名の参加者の句が掲載されている。音淵は小山町の字名で、青木（または小宮山）志郎の住居である。

雪浴びて翡翠飛べり猫柳 椿年
（『大富士』第十巻第四号 昭和十五年四月号五五頁）

これが大富士各支部のあゆみ句會で、椿年参加の句會の戦前最後の記録であった。なお、『大富士』第十四巻第三号（昭和十九年三月号）巻頭にある「句會行脚 豆人」の欄に「駿河小山 小山支部

吟行 一月十三日夜音淵小山歯科醫院（三名）」とあり、小山支部からは小野虹人と岩田沐人の二名と豆人師の三名の句会があったという記録がある。さて、戦後の小山支部の活動記録は、『大富士』第二十三巻第九号（昭和二十八年九月号）の「支部精進情報」欄二十九頁に「静岡県足柄支部七月一日 円通寺、豆人、暢天風外小山支部参加十三名、ダリヤ浴衣青田句会時鳥吟行」という記録からで、椿年の句も一句掲載されている。

時鳥夜更けの峰に何の灯ぞ

（『大富士』第二十三巻第九号 昭和二十八年九月号二十九頁）

続いて、『大富士』第二十三巻第十二号（昭和二十八年十二月号）に「足柄峠」と題する記事があり（二十四―二十五頁）、これはその年の九月九日に足柄支部が豆人師を招いて企画した「足柄峠吟行」の記録である。この時、吟じた椿年の句は、次の一句であった。

句帖手に手に雨の花野に散らはれる

こうした句会を契機として、六十六歳となっている椿年は俳誌への投句を再開する。

老後

まだ餅をつき得る力ありにけり

（四頁）

凶作の田面ともなし初日の出

（一二頁）

（『大富士』第二十四巻第二号 昭和二十九年二月号）

また、その昭和二十九年五月二十三日には、足柄峠豆人句碑の除幕式があり、その時の記念句会で椿年が吟じた句は、次の様であった。

富士からの薫風句碑の座をめぐる

（『大富士』第二十四巻第七号 昭和二十九年七月号 四頁）

これらの句については、前々稿（宮川、二〇一六）で解説しているので、詳述は省略する。こうして、再び俳人として多作多投句の時期を迎えることになった。しかし、翌年の五月同い年であった妻のすみが逝去する。

老妻没す 三句

うなづけど目はうつろなり南風に灯す（『句集 老稚』九五頁）
子の孫の泣くを制して南風に佇つ（『句集 老稚』九五頁）
師よりの悼句南風の線香つぎ足しぬ

（『大富士』第二十五巻第七号 昭和三十年七月号 六頁）

この三句のうち頭の二句は、椿年の『句集 老稚』に掲載されている。第二句はどうか無理をしている椿年の姿を彷彿とさせる。高齢期となると、誰にも避けがたい配偶者との別離、死別である。また、同年の『大富士』十二月号に掲載されている三句は、妻すみの葬儀と初七日頃までの光景描写である。「門位牌」は、椿年の喪の句にしばしば使用された語で、死者がでるとその家の門口に白木の家型の箱に高札のような一本足を付けた目印を立て、そこに死者の戒名を記し蠟燭を灯し、初七日まで立てておく習俗であった（奥野、

一九九七、竹折、一九七二）。

五月雨の底に門ど位牌灯りけり

（七頁）

炎天の柩ゆらゆら坂となる

（一五頁）

つばくらめ雨の門位牌覗き去る

（一五頁）

（『大富士』第二十五卷第十二号 昭和三十年十二月号）

なお、第二句は、『句集 老稚』に「西日坂柩ゆらゆら登りゆく」

（二〇〇頁）のように筆を加えて掲載されている句である。「炎天」では真夏の句となるので、別の夏の季語「西日」と置き換えているが、同一句と見なすべきであろう。当時は土葬であり、村の共同墓地は、同じ区域にある菩提寺勝福寺の裏山の高台にあった。

辛夷咲くや畑尻にある鉄二丁

（『句集 老稚』七一頁）

（『大富士』第二十六卷第七号

昭和三十一年七月号 八頁）

身重なる妻燕の巢見上げけり

追ひかけて草餅くれぬ停留所

（『句集 老稚』五十二頁）

（『大富士』第二十六卷第八号

昭和三十一年八月号 六頁）

第一句は、『句集 老稚』に選句掲載されている謎の句である。

鉄二丁は、一丁は椿年のもの、もう一丁は妻すみのもので、若き日に、二人で並んで畑を耕していた光景を描写したものと考えるべきであろう。あるいは若き日に作句し、未発表だったものを思い出して投句したと考えることもできよう。第二句も、亡くなった妻すみの若き日の思い出の句であるが、この句はこの亡くなった後に燕の巢を見て思い出した若き日の思い出を句としたものか、若き日に

作句したものの未発表であったものを俳誌に投句したものでかであろう。椿年の心の奥に秘めた深い悲しみが伝わってくるような句であろう。なお、妻すみの生前、俳誌に投句したと確認できる句はただ二句で、前述加納野梅主宰の俳誌『新草』から選句編集した『新草俳句集』に掲載のある「春の燈 帯を捲く妻の背高し春灯」（四三頁）一句と、『大富士』第五卷第八号（昭和十年八月号）一句と限られており、他の妻の思い出に関わる句のほとんどは死後散発的に俳誌で発表されていく。

立つ妻に落つ糸屑や春の雨

（『句集 老稚』三六頁）

（『大富士』第五卷第八号 昭和十年八月号二三頁）

さて、第三句の追いかけての句は、いかにも椿年らしい句として、他の俳人の評価が高かった句である。作句時期は、昭和三十一年五月頃の作句と考えられるが、この年の五月六日は妻すみの一周忌に当たる。場所は、椿年の家から駿河小山駅方面に向けて、坂を下りていった六合橋という橋の袂のバス停と推定される。また、椿年が草餅をもって追いかけていったという相手は、草餅が好物で、六合橋のバス停で御殿場駅行のバスを帰路の常としていた、四女と孫ではないかという推測が成り立ち、その場所に居合わせているような光景が目につかぶ。ただし、善良で心温かい椿年のことであり、似たような体験をもつ縁故の人は少なかつたかもしれない。また、この年の秋頃の作と推定できる句に、次のような句がある。

亡妻のおもかげ呆けてちちろ鳴く

（『大富士』第二十七卷第一号 昭和三十一年一月号 一七頁）

亡くなった妻の思い出や面影にひたっているうちに、蟋蟀の鳴く頃となってしまったという句意であろう。「ちちろ」はおおろぎの別名である。

金魚一つ生き残りゐて年暮る、

〔『大富士』第二十八巻第三号 昭和三十三年三月号 一四頁〕
金魚一つ生き残りゐて年を超す 〔『句集 老稚』二二六頁〕

配偶者と死別した淋しさの漂う句である。

昭和三十一年三月『大富士』創刊時からの小山支部同人、湯山逸素が細道會を起こし、俳誌『細道』を創刊する（湯山、一九六九）。交友関係から、椿年も創刊時から同人参加し、多くの俳句を投句したのではないかと推定されるが、この『細道』の所蔵館が皆無であり、作品の確認ができない。

昭和三十三年は、様々な出来事の起こる年である。まず、二月八日九日は、小山支部の大富士同人仲間で、神奈川県湯河原温泉に旅行し、句会が開かれた。ここで作られた椿年の句が、後に『句集 老稚』の冒頭第一句となる句である⁽¹⁾。

潮芥寄せて正月あざみ咲く

〔『句集 老稚』二頁〕
〔『大富士』第二十八巻第六号 昭和三十三年六月号 四頁〕

この年の十月には、この年の四月に生まれた外孫の一人が生後六か月で早世する。また、その翌月、俳句の師であった古見豆人が急逝する。その命日、十一月二十二日は花石路忌と呼ばれることになる。また、豆人が主宰していた『大富士』は主宰の死により、第

二十八巻十一号（昭和三十三年十一月号）をもって廃刊となる。俳句誌の世界に復帰し、わずか五年の歳月が流れたところであった。

俳誌『塔』と『みづうみ』の作品

翌年一月、古見一夫（豆人）が静岡県韮山町（現在の伊豆の国市）の韮山尋常高等小学校長をしていた時の教え子の一人で、門人であった小笠原龍人が、『大富士』の後継誌として、俳誌『塔』を創刊し、塔俳句会を起こす（小笠原、一九七四）。俳誌『塔』は、椿年の遺品として松本家に残されている俳句誌に二号分が現存している。第十一巻第十一号（昭和四十四年十一月号）と第二十五巻第九号（昭和五十八年九月号）の二号であり、その俳誌への椿年の投句状況は判然としなかった。しかし、俳誌『塔』は、東京都新宿区百人町にある公益法人俳人協会が運営する俳句文学館に、初期の刊行巻号から、多くの巻号が収集所蔵されていることが判明した。しかし、第一巻第十号（昭和三十四年十月号）の一号を除けば、比較的継続的に収集されているのは、第五巻第七号（昭和三十八年七月号）以降の巻号であり、しかもかなりの欠巻欠号がある。『塔』の所蔵館として、埼玉県立熊谷図書館埼玉資料室が、多くの巻号を所蔵しているが、第十巻第一号（昭和四十三年一月号）以降のものに限定され、しかも同様に、多くの欠号がある。この二館の所蔵する巻号から、椿年の投句状況を閲覧調査した。まず、俳句文学館所蔵の第一巻第十号を閲覧したところ、椿年の句は「水煙集 同人作品」に五句（二頁）、「塔俳句 小笠原龍人選」に四句（一三頁）掲載されていた。古本屋のネットワークから偶然『塔』の創刊号のみを個人

的に入手することができたが、小笠原龍人が余程急いで創刊したためか、ごく少数の大富士同人の参加のみで、椿年の句はない。第一巻第十号に九句椿年の掲載があるところから、第一巻の何号からかは確認できないが、少なくとも十号からはかなり継続的に投句されていたことが推定できる。また、塔俳句会に参加した大富士小山支部から同人となったのは同年齢の前田岳人と椿年のみであった。しかし、椿年の『塔』への投句は最晩年の昭和五十九年一月号第二十六巻第一号（通巻三〇〇号）まで続き、最も継続的な投句期間が長い俳誌であったことが判断できる。ちなみに、その第二十六巻第二号には、「昭和五十九年新春賀句（年賀状より）」という欄（四六・四七頁）があり、その冒頭の句は、椿年の句で飾られている。事實上、これが俳誌『塔』における最期の句となっている。

柿一つ落ち残りにて年を越す 松本椿年（九十七才）

一方、原田濱人が主宰した『みづうみ』も多くの椿年の作品が掲載されている俳誌である。この俳誌ばかりは、昭和三十六年五月号（第二五六号）から昭和五十八年十一月号（第五二六号）までかなりの巻号が遺品として保存されている。ただし、この遺品も多くの欠号があり、それらの欠号について俳句文学館所蔵の閲覧調査を行っているが、それらの欠号にも多くの椿年の掲載句がある。その『みづうみ』についても、昭和五十八年十一月号までの閲覧収集作業は終了しているが、まだ詳細な分析は完了していない。

俳誌『みづうみ』への同人参加は、原田濱人の門人でもあった湯山素鷗や湯山逸素らの奨めによるものと考えられるが、その同人参加の頃の出来事として、昭和三十五年十月の静岡県小山町と山梨県境にある笹坂峠の原田濱人句碑の除幕式があったと考えられる。こ

の句碑建立の委員長は湯山逸素であり、椿年もこの除幕式に参加していたと判断できる。

昭和三十八年十二月には、義弟の事故死という不幸な出来事が起こる。義弟とは、妻すみの実弟ではないかと推定される。

夜の落葉悲報に急ぐ道細く
風に狂ふ木の葉の中を駆けゆく
昨日埋めし墓なれ木の葉はやためて

（『塔』第六巻第二号 昭和三十九年二月号 一二頁）

しかし、翌年昭和三十九年一月には内孫の京子が婚姻といった慶事も起こる。

仏だんの春灯に震え角かくし
春寒や嫁ぎゆく娘の別れ言

（『塔』第六巻第六号 昭和三十九年六月号 五頁）

しかし、その三月には昭和初期からの俳句仲間であった湯山素鷗が逝去。翌年の一周忌の追善句会の椿年の句である。

素鷗忌の句碑にゆらゆら花の影
花冷や句碑にたつぷり手向け酒

（『みづうみ』第三二〇号 昭和四十年十一月号 八頁）

昭和三十九年七月は、椿年の喜寿の祝が開かれている。その祝宴で披露されたのは、次の句であった。

七夕の笹影に居て喜寿の膳

〔句集 老稚〕一七八頁

〔みづうみ〕二九七号

昭和三十九年十二月号 七頁

翌昭和四十年も慶弔相重なる年となった。四月には内孫奈美江が婚姻を結ぶ。

光り合うて二尾の若鮎瀬を遡る

〔句集 老稚〕五八頁

〔みづうみ〕三二〇号

昭和四十年十一月号 八頁

しかし、この年の九月には松本家に大きな不幸が襲う。嗣子の辰雄がリンパ腺悪性腫瘍で逝去する。

嗣子入院中逝く

漠然と鶏頭赤し一と七日

露の世の父を遺して子は逝きし

〔句集 老稚〕二二五頁

大野分去りたる如し家の中

〔句集 老稚〕二二六頁

子は遠く虚空に秋の日は沈む

〔句集 老稚〕二二六頁

〔塔〕第七卷十二号

昭和四十年十二月号 六頁

『句集 老稚』秋の部の最期は、「嗣子国立千葉病院に逝く 十五句」という前書きのある句で結ばれるが（同句集二二一―二二六頁）が、第四句はその最期の句として置かれている。その辰雄が亡くなる前年の年末の句と推定される句である。当時の医療水準からは、助からない癌であることを悟った嗣子辰雄の願いとは何だったのだろうか。

子の願叶え得ぬま、年暮る、

〔句集 老稚〕二二二頁

〔みづうみ〕第三〇二号

昭和四十年三月号 一四頁

また亡くなる一年前に、作句されたと推定される句に次の句がある。長い闘病生活の果てのことであった。

病窓の花露けし銀河照る

〔句集 老稚〕一六一頁

〔みづうみ〕第二九八号

昭和三十九年十一月號一三頁

次の二句は辰雄の七七忌（昭和四十年十一月九日）の頃の句である。露けし（湿ほったい、涙がち）なのは、父親である椿年の心の内であろう。

墓へ挿す花露けしや大斂忌

〔句集 老稚〕一六七頁

線香の煙露けく土を這ふ

〔句集 老稚〕一六七頁

〔塔〕第八卷第二号

昭和四十一年二月号 二九頁

次の句は、嗣子辰雄を失った後の椿年の深い悲しみと落胆を淡々と語る句と考えられる。また、自分よりさらに悲しみの深い、夫を失った長女イマを氣遣う深いまなざしを寄せる。この二句は『みづうみ』昭和四十五年五月号の湯城選「課題句 余寒」に投句したものである。昭和四十五年二月頃の句というよりそれより前の年にしたためて置いたものを投句したと考える方が自然かもしれない。

失意の目伏せて余寒の火をほじる（『第二句集 限界』一三三頁）

行く先を告げぬ娘を待つ余寒の灯

（『みづうみ』第三六四号 昭和四十五年五月号 三二二頁）

第二句とはほぼ同様の娘イマを氣遣う句がほぼ同じ時期に発表されている。この句の投句時期は、前年昭和四十五年二月頃と考えられるが、情景は辰雄が亡くなる直前、昭和四十年七月～八月の作と考えることが自然であろう。その場合、千葉の国立病院で看病に出かけた娘イマの帰りが遅いので、心配して外で帰りを待っている父親としての椿年の姿を捉えている句となる、

帰り遅き娘に立つ露路や天の川

（『句集 老稚』一六一頁）
（『塔』第二二巻第四号 昭和四十五年四月号 二一〇頁）

嗣子辰雄を失った後、孫達に囲まれた新しい家族関係の再構築を図りながら、椿年は少しずつ元気を回復していく。そんな椿年の心境を語る句が残されている。

迎火を子等に焚かせて見守れる

（『句集 老稚』一七八頁）
（『みづうみ』第三三五号 昭和四十二年十二月号八頁）

窓際に孫と良夜の膳を待つ

（『句集 老稚』一六五頁）
（『みづうみ』第三三七号 昭和四十三年二月号十頁）

謝辞

本研究は、松本椿年翁のご子孫である六女の松本喜美子氏内孫である山崎京子・井上奈美江・松本典彦・時男の各氏による貴重な資料提供が研究の基盤となっている。同じく、国立国会図書館・日本近代文学館・

静岡県立中央図書館・俳句文学館・埼玉県立熊谷図書館・御殿場市立図書館の貴重な蔵書資料を利用させていただいた。また、調査の様々な面で、筆者の実兄宮川光司・早苗ご夫妻にはご支援をいただいた。記して感謝の意を表します。

注

（一）『大富士』第二十八巻第四号（昭和三十三年三月号）三十六頁支部精進情報 小山支部二月八日九日湯ヶ原旅行、十八名中五名その他四名（岳人報）。岳人とは、椿年と同年齢の前田岳人である。二月は旧暦の一月であるので、俳句では正月とする場合がある。

引用文献

石田仏子 昭和五十七年（一九八二）仏子句集 花筏 私家版
奥野義雄 一九九七 まじない習俗の文化史 岩田書店
藤田黄雲 昭和四十九年（一九七〇）原田濱人―俳句とその生涯―私家版
古見豆人選 佐野閑江編 昭和九年（一九三四）大富士句帖 第一輯 啓仁館（昭和九年六月発行『大富士』第一巻第一号～第三巻第十二号 昭和六年一月～昭和八年十二月の掲載句から選句掲載）
古見豆人選 佐野閑江編 昭和十二年（一九三七）大富士句帖 第二輯 大富士吟社（昭和十二年十一月発行『大富士』第四巻第一号～第六巻第十二号 昭和九年一月～昭和十一年十二月の掲載句から選句掲載）
古見豆人 昭和十四年（一九三九）富士に憑かれて『大富士』、第九巻

第七号、四十四～四十五頁

古見豆人選輯 昭和十五年（一九四〇）大富士句帖 第三輯 大富士吟社（昭和十五年八月発行『大富士』第七卷第一号～第九卷第十二号 昭和十二年一月～昭和十四年十二月の掲載句から選句掲載）
古見豆人 昭和十七年（一九四二）大富士風土記（續）駿河小山支部『大富士』第十二 卷第二号（昭和十七年二月号）、四十四～四十五頁

古見豆人選輯 昭和十九年（一九四四）大富士句帖 第四輯 大富士吟社（昭和十九年十二月発行『大富士』第十卷第一号～第十二卷第十二号 昭和十五年一月～昭和十七年十二月の掲載句から選句掲載）

古見豆人 昭和二十八年（一九五三）足柄峠『大富士』第二十三卷第十二号（昭和二十八年十二月号）、二四～二五頁

岩田 昌 一九九七 富士紡労働者・矢後利一の生涯 静岡県近代史研究、第二三号、三三～五九頁

加納野梅編 昭和七年（一九三二）新草俳句集 野梅吟社（昭和七年十二月発行『新草』創刊号～昭和七年八月号より選句掲載）

前田弥一（岳人）昭和四十年（一九六五）自選 岳人句集 私家版

松本椿年 昭和九年（一九三四）各地句座 駿河小山あゆみ句會 大富士、第四卷第十一号、十九頁

松本傳次郎（椿年）昭和四十五年（一九七〇）句集 老雅 私家版

松本傳次郎（椿年）昭和五十七年（一九八二）第二句集 限界 私家版

宮川充司 二〇一六 田園俳人松本椿年の生涯と作品―生涯発達心理学の観点から略年譜の試作― 椋山女学園大学研究論集 第四十七号 人文科学篇 四十三～五十九頁

宮川充司 二〇一七 田園俳人松本椿年の生涯と作品（二）―明治大正期から終戦頃までのライフイベントと作品― 椋山女学園大学研究

論集 第四十八号 人文科学篇 二十三～四十頁

小笠原龍人編 昭和四十三年（一九六八）塔創刊十周年記念合同句集

星苑 塔俳句會

小笠原龍人 昭和四十九年（一九七四）句集 孤灯 塔俳句會

竹折直吉 昭和四十七年（一九七二）日本の民俗三二 静岡 第一法規出版

湯山逸素 昭和四十四年（一九六九）逸素句集 私家版

* 教育学部 子ども発達学科

田園俳人松本椿年の生涯と作品（三）

資料一 松本椿年（傳次郎）年譜（改訂第二版）

年月	年齢	出来事
明治二十年 (1887) 七月	誕生	静岡県駿東郡中嶋村の旧家の三男として誕生（七月七日） 父親松本勘太郎（俳号吉野庵禾捨）四十五歳、母さく四十一歳 義兄紋次郎（俳号竹因）二十六歳、長姉まさ二十歳、次姉くら十二歳、長兄半治十歳、次兄啓作三歳
明治二十四年 (1891) 十月	四歳	義兄松本紋次郎と長姉まさとに長女りん生まれるが、翌明治二十五年（1892）一月早世
明治二十七年 (1894) 四月	六歳 六〇七歳 頃の冬	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校入学 父禾捨の句会の折、最初の朝寒の句を口ずさみ喝采 朝寒く茶袴茶碗の水りいし
明治三十一年 (1898) 三月	十歳	妹あき（勘太郎三女）誕生
明治三十二年 (1899) 八月	十一歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常小学校卒業 父親より俳号椿年を与えられ、この頃から句作 妹あき早世
明治三十四年 (1901) 一月	十二歳	同村の山崎伊三郎の養子となる
明治三十五年 (1902) 三月	十四歳	妹イワ（勘太郎四女）誕生
明治三十九年 (1906) 十月	十九歳	長兄半治室伏まつと婚姻
明治四十年 (1907)	二十歳	静岡県駿東郡六合村立成美尋常高等小学校卒業
明治四十一年 (1908) 二月	二十一歳	義兄松本紋次郎まさ夫婦、砂山のお（明治三十八年二月生一歳）を養女とする
明治四十三年 (1910) 十月	二十三歳	富士紡績小山工場勤務
明治四十四年 (1911) 十一月	二十四歳	次兄啓作小野家（生土）に婚養子 六合村生土三十六番地に転居 山崎伊三郎との養子縁組解消、松本家に復縁 駿東郡北郷村山崎利三郎の次女すみと婚姻入籍 長女イマ誕生

大正二年 (1913) 七月	二十六歳	生家に近い小山町中島一八番地に転居 次女サク誕生
大正五年 (1916) 七月	二十九歳	妹イワ没（行年十五歳） 長兄半治妻まつ没（行年四十四歳）三男三女をなすがいずれも早世 母さく没（行年七十一歳 老衰）
大正六年 (1917) 九月	三十歳	分家（小山町中島六十二番地に居住） 長兄半治岩田やすと再婚 三女志磨誕生
大正九年 (1920) 二月	三十二歳	長兄半治四男紋地（嗣子）誕生 長兄半治妻やす没（行年二十八歳） 長兄半治りょうと再婚
大正十年 (1921) 五月	三十三歳	四女みどり誕生
大正十一年 (1922) 四月	三十四歳	五女愛子誕生
大正十二年 (1923) 九月	三十五歳	長姉まさ没（行年五十七歳） 父勘太郎没（行年八十二歳）
大正十四年 (1925) 三月	三十七歳	富士紡績小山工場労働争議
大正十五年 (1926) 六月	三十八歳	関東大震災 富士紡績小山工場被災 死傷者多数 富望主追悼句会天位（選者服部耕石） 供物たた霊棚の灯の揺らくのみ この頃から本格的に俳句を作り始める 富士紡績小山工場内に俳句部創部『簞』創刊 この頃、加納野梅門下坂本緑村帰村 加納野梅坂本緑村宅訪問（昭和三年以前）加納野梅主宰『鬼栗毛』投句
昭和二年 (1927) 二月	三十九歳	長兄半治妻りょう没 長兄半治没（行年五十歳） 末子（六女）喜美子誕生

昭和四年 (1929)	一月 四月	四十一歳	加納野梅月刊俳誌『新草』創刊 坂本緑村と投句 古見豆人駿東郡小山町立成美尋常高等小学校長に着任 古見豆人あゆみ吟社創設 古見豆人の推薦で渡邊水巴主宰月刊俳誌『曲水』に投句 『曲水』第十四巻第十号(昭和四年七月号)に初掲載 大数の明るさ見ゆる辛夷かな 夕風に春行く麥の戦きかな
昭和五年 (1930)	四月 六月	四十二歳	『あゆみ句帖』刊行 小山町立成美尋常高等小学校、小山町立第一尋常高等小学校に改称 昭和天皇静岡行幸 行幸に就き天覧糸の飾玉を作る ともすれば汗ばめる手を洗いつつ『新草俳句集』百八頁)
昭和六年 (1931)	一月 十月	四十三歳 四十四歳	古見豆人大富士吟社創設 俳誌『大富士』創刊同人 草庵新築 飾矢の鬼門差しゐる銀河かな(『曲水』第十七巻二三号)
昭和七年 (1932)	十月	四十五歳	富士紡績小山工場退社
昭和八年 (1933)	一月 四月	四十五歳	正月富士登山 雪中富士登山五句『曲水』第十八巻第四号の竿頭を飾る 吹雪く中に御慶かはして消えにけり (『曲水』第十八巻第四号三十五頁) 末子喜美子小山第一尋常小学校に入學 木の芽 末子入學 広げたる本の句ひや木の芽晴れ (『大富士句帖第一輯』十七頁)
昭和九年 (1934)	九月	四十七歳	石田佛子あゆみ句会初参加
昭和十年 (1935)	一月	四十七歳	この頃から『曲水』への投句休止 義父逝く三句 凍土に放り出したる飾りかな 松とりし穴に立てけり門位牌 霜に立てて折れし線香や笹子鳴く (『大富士第五巻第三号(昭和十年三月号)』三頁)

	七月	四十八歳	小山第一尋常高等小学校教員大島源悟郎君溺死(三句) 水底の子を呼ぶ母や雲の峰 夏の草句はしく焚火煙けり 暮れんずる水に火映える河鹿かな (『大富士第五巻第十号(昭和十年十月号)』四頁)
昭和十一年 (1936)	三月	四十八歳	次姉くら没(行年六十三歳)
昭和十二年 (1937)	十一月	五十歳	日中戦争の勃発により甥紋地招集 秋雨を擧手にはじきて征きにけり(『大富士第八巻一号』昭和十三年一月号)
昭和十三年 (1938)	四月	五十歳	古見豆人小山第一尋常高等小学校長を退職し、湘南学園(高座郡藤澤町鶴沼)に異動 大富士吟社東京世田谷に移転 豆人先生送別句會 半こげしまま咲満ちし櫻かな (『大富士第八巻第六号』各地句座 駿河小山 豆人先生別句會四月二日小山第一尋常高等小学校被服室)
昭和十四年 (1939)	一月	五十一歳	初孫光弘誕生(辰雄イマ長男) 孫の尿膝にぬぐとし今朝の秋 秋の灯や己がおならに怖ゆる兒 (『大富士第九巻第十一号』昭和十四年十一月号)
昭和十五年 (1940)	四月 五月 八月	五十二歳 五十二歳 五十三歳	豆人師小山再来訪 本家甥紋地戦死 末子喜美子を松本本家の養女とする 長女イマの配偶者杉山辰雄と養子縁組(松本家嗣子とする) 甥紋地の遺骨と軍刀帰還 戦死せる甥の遺骨を迎えて(二句) 南風 南風や血曇り濃ゆき日本刀 抱く遺骨脈うてるかに南風をゆく (『大富士十句帖 第四輯』『大富士第十巻第八号』) 孫京子(辰雄イマ長女)誕生 次女サク婚姻
昭和十六年 (1941)	二月 四月	五十三歳	『大富士第十一巻四号』への投句を最後に投句休止 父八十六歳生前墓碑を建つ(二句)

田園俳人松本椿年の生涯と作品（三）

昭和十七年 (1942) 二月	五十四歳	孫奈美江（辰雄イマ次女）誕生
昭和十八年 (1943) 十一月	五十六歳	義兄紋次郎没（行年八十六歳）
昭和十九年 (1944) 二月	五十六歳	孫光弘早世（行年六歳）
昭和二十年 (1945) 二月	五十七歳	三女志磨婚姻
昭和二十一年 (1946) 四月	五十八歳	次兄啓作没（行年六十一歳） 孫典彦（辰雄イマ次男）誕生
昭和二十二年 (1947) 四月	五十九歳	四女みどり婚姻 末子喜美子、山崎栄と婚姻（松本家の嗣子とする）
昭和二十三年 (1948) 五月	六十歳	『大富士』投句一時復帰 第十八巻第五号・十一号 十九巻六号・十号 OHC による大富士の検閲廃止 本家外孫卓美（松本栄喜美子長男）誕生
昭和二十四年 (1949) 四月	六十一歳	孫時男（辰雄イマ三男）誕生
昭和二十五年 (1950) 九月	六十三歳	本家外孫幸久（松本栄喜美子次男）誕生
昭和二十六年 (1951) 十一月	六十四歳	五女愛子婚姻（石田仏子夫妻が仲人）
昭和二十九年 (1954) 五月	六十六歳	『大富士』第二十四巻二号への投句再開 老後 まだ餅をつき得る力ありにけり 凶作の田面ともなし初日の出 足柄峠豆人句碑（春風は幼けき日の匂ひかや 豆人）除幕 式記念句会（五月二十三日） 富士からの薫風句碑の座を巡る（記念句会）

十一月	六十七歳	本家外孫いさ子誕生（松本榮喜美子長女）
昭和三十年 (1955) 五月	六十七歳	妻すみ逝去 行年六十九歳 老衰 老妻没す 三句 うなづけど目はうつろなり南風に灯す 子の孫の泣くを制して南風に佇つ 師よりの悼句南風の線香つき足しぬ （『大富士』第二十五卷第七号 昭和三十年七月号）
昭和三十一年 (1956) 三月	六十八歳	湯山逸素細道會を起こし、俳誌『細道』創刊
昭和三十三年 (1958) 十月 十一月	七十一歳	外孫孝光早世 古見豆人没（十一月二十二日花石路忌） 主宰豆人の急逝により俳誌『大富士』第二十五卷十一号（昭和三十三年十一月号）をもって廃刊 小笠原龍人『大富士』の後継誌として『塔』創刊 この年の内に『塔』同人として参加
昭和三十四年 (1959) 一月	七十一歳	籠坂峠原田濱人句碑（籠坂峠の月代遅し谷の蟲 濱人 除幕式 建設委員長湯山逸素の誘いにより列席 この頃、原田濱人主宰の俳誌『みづうみ』に同人参加
昭和三十五年 (1960) 十月	七十二歳	義弟事故死 入寂の足の硬ばり北風す （『みづうみ』第二八九号 昭和三十九年二月号） 夜の落葉悲報に急ぐ道細く 風に狂ふ木の葉の中を愴ゆく 昨日埋めし墓なれ木の葉はやためて （『塔』第六卷二号 昭和三十九年二月号）
昭和三十八年 (1963) 十二月	七十六歳	孫京子婚姻 仏だんの春灯に震え角かくし （『塔』第六卷第六号 昭和三十九年六月号） 湯山素陽没（三月十一日素歐忌） 喜寿の祝 七夕の笹影に居て喜寿の膳（老雅） （『みづうみ』第二九七号 昭和三十九年十月号）
昭和三十九年 (1964) 一月 三月 七月	七十五歳 七十六歳	

昭和四十年 (1965) 三月	七十六歳	湯山素鷗一周忌追善句会 素鷗忌の句碑にゆらゆら花の影 花冷や句碑にたつぶり手向け酒 (『みづうみ』第三一〇号 昭和四十年十一月号) 孫奈美江婚姻 光り合うて二尾の若鮎瀬を遡る
四月		
九月	七十七歳	(『みづうみ』第三一〇号 昭和四十年十一月号) 嗣子辰雄病没(行年五九歳 九月二十二日没) 嗣子淋巴腺肉腫にて逝く 秋冷の耳寄せ聴くや吾子の声 (『みづうみ』第三一二号 昭和四十一年一月号)
昭和四十一年 (1966) 一月	七十七歳	菩提寺勝福寺住職突如入寂 明けきらぬ山門凍ての固き踏む (『塔』第八巻第五号 昭和四十一年五月号)
昭和四十二年 (1967) 十二月	七十九歳	親族事故死(十二月二十八日) 元日や床に据えたるお骨壺 (『塔』第十巻第六号 昭和四十三年六月号) 会葬者揃う間庫裡のストープへ 葬り来て浄めの手塩肝に入む (『みづうみ』第三四二号 昭和四十三年七月号)
昭和四十三年 (1968) 十一月	八十歳	曾孫袴着 袴着の拍手小さく響きけり (『塔』第十一巻第二号 昭和四十四年二月号)
昭和四十五年 (1970) 四月	八十一歳	『句集 老稚』出版
昭和四十六年 (1971) 四月	八十二歳	父松本松本勘太郎(俳号吉野庵禾裕)の句碑松本本家に建 立 初日の出月をうしろに拝みけり 禾裕 冬晴の句碑自宅前庭に建立 冬晴や底藻さやかに動き居り 椿年
昭和四十七年 (1972) 八月	八十五歳	『みづうみ』主宰原田濱入没(八月四日 八十八歳)

昭和四十八年 (1973) 四月	八十五歳	前田岳人没 行年八十七歳 岳人逝く五句 『第二句集 限界』 次に逝くは吾かも春の雲仰ぐ 花冷えの土かけて永遠の別れかな (『みづうみ』第四〇二号 昭和四十八年七月号)
昭和四十九年 (1974) 三月	八十六歳	米寿の祝 子孫曾孫うらかに顔を揃えけり (『塔』第十六巻第八号 昭和四十九年八月号) 石田仏子 and 光市に転居 五月十九日中島公民館で送別句会 家督を嫡孫典彦に譲る 孫にゆずる登記すまし月涼し (『塔』第十六巻第十一号 昭和四十九年十一月号)
昭和五十年 (1975) 十月	八十八歳	孫典彦婚姻
昭和五十六年 (1981) 六月	九十三歳	勝福寺にて岩田柴人・小野虹人の追悼句会(六月十日) 追悼の句もなく梅雨の忌に侍る (『みづうみ』第四九九号 昭和五十六年八月号) 石田仏子没(九月十八日) 行年七十四歳
昭和五十七年 (1982) 四月	九十四歳	『第二句集 限界』出版
昭和五十八年 (1983) 八月	九十五歳	『仏子句集 花筏』没後出版
昭和五十九年 (1984) 九月	九十六歳	湯山逸素没 行年九十二歳
昭和六十年 (1985) 二月	九十八歳	行年百歳にて逝去 春風に乗つてゆかばや句の行脚 絶吟

(注) 太字の記載事項が、追加補完事項